

## 大鏡 延喜の帝

『大鏡』のジャンルは歴史物語。後に続く『今鏡』『水鏡』『増鏡』と合わせて「四鏡」と呼ばれます。(だいこんみずまし)  
(形式)：「紀伝体」で記されています。



大宅世継(90歳)  
夏山繁樹(1801歳)  
繁樹の妻  
若侍(30歳)

三人の老人の昔話を聞きながら、若侍が時々質問する会話スタイルで、その場にいた記述者が書き留めたという問答形式になっている。

※全編、四人の会話のため、敬語の学習をするときに注意を要します。  
・敬意を持つのが「作者」ではなく「語り手のうちの誰か」を特定しないといけません。

(内容)

藤原道長の栄華を中心に描いていますが、彼らの権力欲を皮肉を交えて批判的にも描いています。

P 122 さいつころ、雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例の人よりはこよなう年老い、うたてげなる翁二人、嫗と行き合ひて同じ所に居ぬめり。

(冒頭部分の現代語訳) さきごろ、雲林院の菩提講に参拝したのですが、普通の人よりはかけ離れて年老いた、異様な感じのするおじいさんが二人、おばあさん(一人)とぼったりあって、同じ場所に座ったようです。

L 1 常に笑みてぞおはしましける。※ぞーける(過去・連体形)係り結び

※おはしまし(いらっしやる・夏山↓帝への尊敬語)

L 2 けしき(気色)「景色」という漢字は×。気持ち、様子の意味。

L 2 けしきにつきてなむ、人はもの言ひよき。※なむーよき(形容詞・連体形)係り結び

L 3 聞かむがためなり。※「む」意志の助動詞。(訳・聞こうとするためである。)

L 4 それ、さることなり。※「それ」は帝が言った内容を受けた指示語。

L 6 いかで ※この文では「どうかして、どうしても」の意味ですが、ほかに①どうして、②どうしてか。いやそんなことはない、という意味になることもあります。(訳・どうしても七月や九月には死にたくない。)

L 6 旧暦の月の表現

睦月(1月)	如月(2月)	弥生(3月)	卯月(4月)	皀月(5月)	水無月(6月)	文月(7月)
葵月(8月)	長月(9月)	神無月(10月)	霜月(11月)	師走(12月)		

### 五節句

一月七日(人日の節句)：七草がゆ 三月三日(上巳の節句)：ちらし寿司、白酒  
五月五日(端午の節句)：菖蒲の節句)：ちまき、柏餅 七月七日(七夕の節句)：笹竹の節句)：縫製の技術上達  
九月九日(重陽の節句)：菊酒

L 7 失せさせ給ひて ※動詞+尊敬の助動詞+尊敬の補助動詞(訳・崩御なさって)

P 123 L 2 とみにこそ飛びのかざりしか ※こそーしか(過去・已然形)係り結び

## 弓争ひ

◎語句の読み書きに注意◎

P 124 L 1 帥殿(そちどの) L 2 饗応(きやうよう)：現代語の「きようおう」ではないことに注意!  
L 3 下臈(げらふ)：道長は当時、伊周より立場が低かったため、こう呼ばれていました。  
L 10 無辺世界(むへんせかい) P 125 L 1 大臣(おとど)

※この場面において、帥殿と呼ばれる藤原伊周と、入道殿と呼ばれる藤原道長の立場を比べると、伊周が上で、道長が下である。二人の立場の違いを考えて、周囲の人々がさまざまな配慮(付度)をしていることがうかがわれます。

L 2 いみじう饗応し申させ給うて(道長に)たいそう機嫌を取り、もてなして

L 3 下臈におはしませど、前に立て奉りて(道長は)官位は低くていらっしやるが、弓の順番を先にお立て申して、

L 5 「いまふたたび延べさせ給へ。」ももう二回、勝負をお延ばしなさい。↓官位が上の、伊周を勝たせるため。

L 7 「道長が家より、帝・后立ち給ふべき。」↓「道長の家から天皇や皇后がお立ちになるはずなら」

↓今は官位が低くても、必ず上り詰めるという意味が明白です。※あとの、「撰政・関白すべきものならば」も同じ。

※道長の弓の腕前と、出世への自信や意欲を見せつけられた伊周は、「的のあたりだに近く寄らず、無辺世界を射給へる」

↓(的の(中心はおろか)周辺にさえも弓が寄っていかず、とんでもない方向を射なさった)という状態になります。

## 三舟の才さえ

◎ 語句の読み書きに注意◎

P 126 L 1 逍遙（せうえう）  
舞い、狩猟などを指します。

作文（さくもん）

管弦（くわんげん）：古文で「あそび」と出てきたら、楽器演奏や

L 2 その道にたへたる人々：「耐へ」＝優れている、秀でてている

◎ 和歌の解釈◎

小倉山嵐の風の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき

※小倉山嵐の風：小倉山と嵐山に吹いている風

※寒ければ：寒いので

※ぞ―なき（形容詞・連体形）係り結び

※紅葉の錦着ぬ人ぞなき＝紅葉の錦の衣を着ていない人はいない↓誰もが皆、錦の衣を着ているように見える。（寒い風に舞った紅葉の葉っぱが人々の着物に降りかかっている様子をたとえたもの）

L 7 あそばす

※「遊ぶ」の尊敬語。この場面では大納言・公任が和歌を詠んでいる場面なので「お詠みになる」と訳しているが、箏を弾いている場面なら「箏を演奏なさっている」となるし、狩りをしている場面なら「狩りをなさっている」と訳さねばなりません。

L 8 ～ 9 ※かばかりの詩を作りたらましかば、名の上がらむこともまさりまし。（反実仮想）：実際には漢詩を作った

はいいないが、もし作っていたとしたならば【反実】、和歌と同じくらいの評判が上がったのではないかと、仮に想像している。【仮想】

P 12 ～ 13

圃

「二事のすぐるだにあるに」とはどのような意味か。※「だに」は「最小限の限定」、「程度の軽いものを示して、より程度の重いものを類推させる」副助詞です。和歌、管弦、漢詩のうち、たった一つだけできる

だけでも素晴らしい（最低限を示す）と言って、他の二つも全部できる（重いものを類推）公任のことを褒めています。

五、ひらがな（仮名）：女性の日記など、漢字（真名）：男性の書く役所の正式文書など

## 権力者道長の人物像

この世をばわが世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば

『栄花物語』『大鏡』：不掲載

『小右記』藤原実資の日記のみに掲載された和歌。

※ぞ―思ふ（動詞・連体形）係り結び

※望月：満月